

Title	1780年代のゲーテとヘルダー：ゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学の接点
Sub Title	Goethe und Herder in den 1780er Jahren : Goethes Morphologie und Herders Geschichtsphilosophie
Author	濱田, 真(Hamada, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.2 (2006. 12) ,p.157- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Essays in Honour of Profrssor Takahiro Shibata
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0157">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910002-0157</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1780年代のゲーテとヘルダー  
—ゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学の接点—

Goethe und Herder in den 1780er Jahren  
—Goethes Morphologie und Herders Geschichtsphilosophie—

濱田 真

Makoto Hamada

1770年のシュトラスブルクでのゲーテとヘルダーの出会いは、ドイツ文学史上きわめて重要な出来事とされている。21歳の若いゲーテが5歳年長のこの少壮批評家から受け取ったさまざまな文学的・思想的刺激が、その後のドイツ文学の展開にとっていかに大きな意味を持つものであったかはこれまで頻繁に論じられてきた。<sup>1</sup> ところでこの二人の関係は、1776年にヘルダーがビュッケブルクからヴァイマルに移ってからはさまざまな外的要因によって疎遠になっていくが、1783年8月のゲーテの誕生日を境に再び親しいものとなり、その後ほぼ10年にわたって両者の関

<sup>1</sup> 日本における主要なドイツ文学史の記述においても、シュトラスブルクでの両者の出会いは高く評価されている。例えば手塚富雄は「ドイツの文学、いな世界の文学において、これほど大きい意味をもった、そして生産的な出逢いはないだろう」と述べ、また、関楠生は「このふたりの出会いをドイツ文学史上の一大事件と考えるのが文学史の常識となっている」と記している。手塚富雄・神品芳夫『増補 ドイツ文学案内』岩波文庫別冊3 1993年 70ページ。佐藤晃一編『ドイツ文学史』明治書院 1985年 81ページ。

係は良好で、思想的に豊かな実りをもたらすことになる。これは内容的に見ても1770年の出会いに劣らず密度の濃いものだが、これまで文学史ではこれについてほとんど触れられてこなかった。<sup>2</sup> 1780・90年代のゲーテの活動はシュタイン夫人との交友、イタリア旅行、シラーとの古典主義文学の確立を中心に記述されており、ヘルダーとの思想交流にはほとんど目が向けられなかった。その理由としては、この交流によってゲーテは解剖学・植物学研究を、ヘルダーは歴史哲学研究を推し進めることになり、その内容が文学の枠組みをはるかに超えている点、そしてこの二つの研究が別個の方法論に基いており、その間の共通点を見出すことが難しい点を挙げることができるだろう。しかし最近では解剖学・植物学を土台とするゲーテの形態学の重要性が再認識され、形態学的・思想的・文学的意味がさまざまな角度から詳細に検討され始めている。<sup>3</sup> また、ヘルダーの歴史哲学については、その代表的著作『人類歴史哲学の諸理念』（以下『イデー』と略記）の新たな批判校訂版が数年前に刊行され、ヘルダー歴史哲学の射程が当時の思想・文学・文化状況との関連から綿密に考察されている。<sup>4</sup> そしてゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学の背景には、スピノザ哲学受容等の共通の思想的・文化的問題が存在することも明らかになっている。このような研究状況において、改めて1780年代のゲーテとヘルダーの交友に目を向け、その思想的意味を問い直す必要性が指摘されている。<sup>5</sup> 本論考ではこれらを踏まえて、両者の思想交流の特質をゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学との成立の観点から考察し、

<sup>2</sup> フリッツ・マルティーニの広範なドイツ文学史においても、また上述の文学史においても、1780年代のゲーテについてはシュタイン夫人との交友やイタリア旅行を中心に叙述されており、ヘルダーとの交流については触れられていない。フリッツ・マルティーニ 高木実他訳『ドイツ文学史』三修社1991年。

<sup>3</sup> Vgl. Dorothea Kuhn: Typus und Metamorphose. Goethe-Studien. Marbach 1988. 高橋義人『形態と象徴 ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店1988年参照。

<sup>4</sup> Vgl. Johann Gottfried Herder. Werke. Hrsg. von Wolfgang Pross. Band III: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. Carl Hanser Verlag, München 2002. (以下略号H3とページ数を表示。)

この交流がゲーテとヘルダーの思想展開にどのような意味を持っていたのかを明らかにしたい。

## 1.

まず1783年に再開した交流をゲーテとヘルダーがどのように受け止めていたのか確認しておこう。1776年にヘルダーはゲーテの尽力によりプロテスタントの地方総監督として家族とともにヴァイマルに移り住むことになったが、その後の両者の間にはゲーテの国政への関与やヘルダーの学校教育改革計画をめぐるさまざまな誤解が生まれ、関係は疎遠になっていく。種々の誤解が解けて両者がお互いに深く理解し始めるのは1783年8月28日にゲーテが自分の誕生日にヘルダー夫妻を招待してからであり、両者はゲーテが休暇のイルメナウ・ハルツ旅行からヴァイマルに戻った10月5日から急速に接近することになる。これについてゲーテは次のように述べている。

「ヘルダー夫妻を長いこと私から引き離していた重苦しい雲がようやく、そして私は確信しているのだが、今後ずっと消えることになるのは、私の人生ですばらしい幸せだ。」<sup>6</sup>

「…私とヘルダーの間にもはや引き離すものは何もない。私があんなに頑なに口を閉ざしていなければ、すべてはもっと早く解決していたのだが。」<sup>7</sup>

ヴァイマル移住後7年目のこの出来事をヘルダーと妻カロリーネの側

<sup>5</sup> Vgl. Hans Dietrich Irmischer: Goethe und Herder — eine schwierige Freundschaft. In: Johann Gottfried Herder. Aspekte seines Lebenswerkes. Hrsg. von Martin Keßler u. Volker Leppin. Berlin 2005, S. 233-270.

<sup>6</sup> 1783年11月12日ヤコービ宛書簡。Johann Wolfgang von Goethe. Briefe. Hamburger Ausgabe. Hrsg. von Karl Robert Mandelkow. Bd. 1: 1764 -1786. 4. Aufl. München 1988, S. 430.

がどのように受け止めたかは、例えばカロリーネの次の言葉からも推測することができる。「私たちの地平は明るく、穏やかで、落ち着いたものになり始めています。…ゲーテは私の夫に心からの好意を持って接してくれます。そしてこの気持ちはこの二人の意気消沈した心にバルサムのように働いています。というのもゲーテは私の夫以上に苦悶しているのです。」<sup>8</sup> また、ヘルダーはハーマンに宛てて、ゲーテも自分と同様にヴァイマル社会で苦悩していること、現在ではゲーテとの間に以前の信頼関係が回復したことを告げている。<sup>9</sup> 当時仕事の重圧や宮廷生活への不応、ヴァイマル社会への不満等により孤立感を深めていたヘルダーにとってゲーテとの交友が大きな救いとなったことは想像に難くない。現在でもヘルダー研究の主要文献としてその価値を失っていない『ヘルダー』の著者ルドルフ・ハイムは、この交友が作家としてだけでなく人間としてのヘルダーに豊かに作用したこと、そして1770年にはゲーテに対して教師の立場にあったヘルダーが、この時期にはゲーテから積極的に知識を吸収しようとする姿勢をとっていることに注意を促している。<sup>10</sup> ハイムはさらに、90年代のゲーテとシラーの結びつきが、芸術的営みという高次の目的に向けられた美学的・哲学的共同作業であるとすれば、80年代のゲーテとヘルダーの交友はより自然で親密で心のこもった、対等な人間の間に生まれたものであったと評している。<sup>11</sup>

1783年の10月以降ゲーテは頻繁にヘルダー家に招かれ、当時の彼に欠けていた家庭的温かさに触れることになるが、そのような和やかな雰囲気の中でゲーテの文学作品やヘルダーの歴史哲学研究について意見が

7 1783年12月末ラヴァーター宛書簡。Goethes Briefe. Bd. 1, S. 433.

8 1783年12月14日シャッフハウゼン宛書簡。Vgl. Rudolf Haym: Herder. Nach seinem Leben und seinen Werken. Bd. 2. Berlin 1958, S. 227.

9 1784年5月10日ハーマン宛書簡。Johann Gottfried Herder. Briefe. Gesamtausgabe 1763-1803. Hrsg. von Wilhelm Dobbek und Günter Arnold. Bd. 5. Weimar 1979, S. 44.

10 Rudolf Haym: a.a.O., S. 231.

11 Ebd., S. 229.

交わされることになる。ゲーテは1817年に出版された『形態学序説』のなかで、当時を振り返って次のように述べている。「ヘルダーが『イデー』執筆を計画していたおかげで、苦勞に満ちた私の自然研究もはかどり、それどころか楽しいものにさえなった。…お互いに意見を交わし、議論を闘わせることによって、われわれの知的財産は日々純化され、豊かになっていった。」<sup>12</sup>

『イデー』は1784年から91年にかけて4部構成で執筆されたヘルダーの代表的な歴史哲学の著作である。ヘルダー自身述べているように、この作品は人類史の問題を単なる「文化史」の領域を超えて「ずっと深いところから論じ起こし、考察の範囲をずっと拡大して」扱ったものであり、<sup>13</sup> そこには「世界の形成についての全史」を記述するという企図の下に彼の多年にわたる幅広い思索が凝集されている。この作品の執筆時期がゲーテとの緊密な思想交流の時期と重なっていることは偶然ではない。ゲーテは『イタリア紀行』のなかで『イデー』に何度も言及し、この著作が彼にとって持つ意味を強調している。

「ヘルダーの『イデー』がどれほど私を喜ばせているかは言葉では言い表せない。私は救世主を待望することができないから、これこそは私にとって最愛の福音書である。」<sup>14</sup>

「取り急ぎ、『イデー』にたいして心からの感謝を捧げます。この書はもっとも愛すべき福音として私のもとに届き、私の生涯のもっとも重要な諸研究は、すべてこの書物のなかに融合しています。

<sup>12</sup> Johann Wolfgang Goethe. Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Vierzig Bände. Bd. 24. Schriften zur Morphologie. Hrsg. von Dorothea Kuhn. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a. M. 1987, S. 405. (以下、略号 KA24 とページ数を表示。)

<sup>13</sup> H 3, S. 10.

<sup>14</sup> Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Hrsg. von Erich Trunz. Bd. 11: Autobiographische Schriften. 14. Aufl. München 1981, S. 415. (以下略号 HA と巻数、ページ数を表示。)『イタリア紀行』からの翻訳は相良守峯訳(ゲーテ『イタリア紀行』岩波文庫1992年)により、必要な箇所を変更した。

非常に長い間苦勞されたものがいまやこのように完全な姿で示されているのです。この書物によってあなた（ヘルダー）はどれほど多くのあらゆる善きものにたいする喜びを私に与え、新たにしてくれたことでしょう。」<sup>15</sup>

『イタリア紀行』では、1787年に執筆されたヘルダーのスピノザ解釈の書『神についての対話』についても次のように述べられている。「『神』（『神についての対話』）は私の最上の伴侶である。…私はそれによって鼓舞されて自然の事物のなかにさらに押し進んでゆき、特に植物学においては「ヘン・カイ・パーン」（一にして全なるもの）にまで到達したが、それは私を驚嘆させている。」<sup>16</sup>

これらの言葉から明らかなことは、80年代のゲーテにとって『イデーコン』と『神についての対話』が重要な思想的導きの糸となっていることである。この時期のゲーテは、ヘルダーの歴史哲学およびスピノザ研究のなかに自らの形態学研究の思想的基盤を認めており、これらの著作から形態学研究を促進する刺激を積極的に受け取っていたと見ることができるだろう。

いっぽうヘルダーも、ゲーテの存在が自らの研究の支えになっていることを認めていた。1784年5月のハーマン宛書簡のなかでヘルダーは、自分の妻カロリーネとゲーテの激励がなかったら『イデーコン』第1部は生まれなかつたらうと述べているが、<sup>17</sup> これはヘルダーの歴史哲学構想にとってゲーテの意見が重要な意味を持っていたことを暗示している。形態学と歴史哲学という二つの領域がゲーテとヘルダーの交流において密接に結びつき思想的に共鳴していたと言えるだろう。

ゲーテが形態学（Morphologie）という言葉をはじめて用いたのは1796

<sup>15</sup> Ebd., S. 417.

<sup>16</sup> Ebd., S. 395.

<sup>17</sup> 1784年5月10日ハーマン宛書簡。Herders Briefe, Bd 5, S. 43.

年9月25日の日記だとされているが、<sup>18</sup> 解剖学・植物学に従事していたのは80年代からであり、原型論をはじめとする形態学の基礎づけがなされたのは80年代と見てよいだろう。また、ヘルダーの歴史哲学はスピノザ研究と密接に結びついており、『イデー』においても『神についての対話』で扱われるスピノザ的自然解釈の問題が重要な位置を占めているので、『イデー』を80年代のヘルダー思想の包括的作品と見なすことができる。そこで本稿では、ヘルダーの作品については『イデー』に焦点を絞り、ゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学という二つの領域の接点について考察を進めていきたい。

## 2.

最初にゲーテ形態学の基本特徴を外観しておこう。<sup>19</sup> 『形態学序説』のなかでゲーテは次のように述べている。

「しかしあらゆる形態、特に有機体の形態を観察してみると、変化しないもの、静止したもの、他とのつながりを持たないものはどこにも見いだせず、すべてはたえまなく動いてやむことを知らないことがわかる。だからわれわれのドイツ語が普通、生み出されたものや生み出されつつあるものに対して形成 (Bildung) という言葉を用いているのは、十分に根拠のあることなのである。」<sup>20</sup>

<sup>18</sup> Johann Wolfgang Goethe. Tagebücher. Hrsg. von Wolfgang Albrecht u. Edith Zehm. Stuttgart 2000. Bd. II 1, S. 80, Bd. II 2, S. 497. Dorothea Kuhn: Goethes Morphologie. In: KA24, S. 853.

<sup>19</sup> この章の記述については以下の文献に負うところが大きい。Dorothea Kuhn: Typus und Metamorphose. Goethe-Studien. Marbach 1988. 高橋義人『形態と象徴』岩波書店。

<sup>20</sup> KA24, S. 392. ゲーテの形態学関連著作からの引用は高橋義人訳 (ゲーテ 高橋義人編訳『自然と象徴—自然科学論集—』富山房百科文庫 33 1984年) により、必要な箇所は変更した。

ゲーテは雑誌『形態学に寄せて』に「有機的自然の形成と変形」(Bildung und Umbildung organischer Natur) という表題を付しているが、<sup>21</sup> ゲーテにとって形態学とは、生物の形態の生成変化する過程を捉えるもの他にならなかった。植物学においてゲーテに大きな影響を与えたリンネが植物の多様性を分類によってスタティックに把握したのに対して、ゲーテは生きた具体的な生命の形を動的に把握することを目指した。そしてその際の柱となるものがメタモルフォーゼ論と原型論であった。

ゲーテは植物の基本的な器官である葉が茎葉、萼、花卉、果実、種子へと変形し、また脊椎動物では椎骨が尾骨、頸椎、頭蓋へと変形するという生物における変化の相に注目し、このような生命現象のダイナミズムをメタモルフォーゼとして把握した。<sup>22</sup> このメタモルフォーゼ概念によって、それまで固定的・分類的に把握されていた自然の差異と多様性が連続的・力動的に示されることになる。一方、1796年の「骨学に基づく比較解剖学総序説草案の最初の3章についての論説」には次のような叙述が見られる。

「だからこそわれわれは何はばかることなく主張できたのであろう、ありとあらゆる比較的完全な有機的自然—そのなかには魚類、両棲類、鳥類、哺乳類、そして哺乳類の最高位に位置するヒトが含まれる—は、すべてあるひとつの原型にもとづいて (nach Einem Urbilde) 形成されているのであって、この原型はそれぞれの生物の固定した部分においてこそ多少の違いを見せてはいるものの、それでも日々生殖によって作りあげられたり、作り変えられたりしている、と。」<sup>23</sup>

<sup>21</sup> Ebd., S. 399.

<sup>22</sup> Vgl. Goethe Handbuch. Bd. 4/2 Personen Sachen Begriffe. Hrsg. von Hans-Dietrich Dahnke u. Regine Otto. Stuttgart 2004, S. 781 ff.

<sup>23</sup> KA 24, S. 268. ゲーテ 高橋義人編訳『自然と象徴—自然科学論集—』161ページ。

原型 (Typus, Urbild) とはすべての植物と動物を包摂する原植物と原動物を指す概念として、自然の根源的な同一性と普遍性を暗示するものであるが、自然の多様性を反映するメタモルフォーゼとは対照的な位置にある。ゲーテはメタモルフォーゼによって動的変化のプロセスを把握しようと努めながらも、生物の変化の多様性が植物と動物という一定の枠組みを超えることはないという事実にも注目していた。生物全体を包括する自然の同一性、不変性、単一性は原型概念によって示されることになる。そして重要なのはここでは原型とメタモルフォーゼは別個に存在するのではなく、表裏一体の関係にあるとされる点である。原型は不変であると同時に変幻自在である海神プロテウスに例えられる。自然の生命は同一なるものが多様に変化するプロセスであり、一にして多、多にして一とも表現される。ここで見落としてはならないことは、原型という見方を提示することによって、多様な生物の間に比較の基準が設けられ、生物間の類似性と差異性が明らかにされうる点である。そして現在では代償の法則と呼ばれるいわゆる予算一定の法則によって、具体的な生物の比較考察が提示されることになる。

ゲーテの形態学ではこの原型とメタモルフォーゼと並んで、分極性と高昇、形成意欲、直観等の概念が重要な意味を持つが、ここではこれらの点には立ち入らずに、ヘルダー歴史哲学との接点について論を進めていきたい。

### 3.

ヘルダーは1784年に出版された『イデー』第1部第2巻で地球上の有機体の組織について考察を進めているが、そこには次の一節がある。

「ここで否定できないことは、①地上の生物が非常に多様であるにもかかわらず、いたるところで構造のある種の一様性、いわば一つ

の原型 (Hauptform) が支配しているように見えることである。そしてその原型は実にさまざまに変化するのである。…すべてのものをひとつの連関のうちに見て取る永遠の存在者の眼には、氷の断片が生まれる姿とそれに付着して生まれる雪片は、おそらく依然として母胎の胎児の形成と②類比的関係のうちにあるだろう。…それゆえ自ずと明らかなことは、この主要形態は性、種、規定、境域に従って常に変化せざるをえないので、②一つの範例が他のものを説明することになる。自然がこの被造物において片手間仕事として棄てたものを、他の被造物ではいわば主要な仕事として成し遂げる。…したがってこれを研究しようと思うものは③一を他のうちに研究しなければならぬ。③この部位が覆われ、等閑に付されているように見えても、それは別の被造物を指示しているのであって、そこでは自然がその部位を完成させ明らかに示してくれているのである。」<sup>24</sup>

(下線部筆者)

この一節はヘルダーの有機体論の中核をなす部分だが、特に下線を付した部分に注目してみたい。下線部①では、多様な有機体のうちに存在する原型の絶え間ない変化が述べられている。ヘルダーは、原型概念を文脈に応じて Hauptform, Typ, Haupttyp, Prototyp, Urbild 等の言葉で表現しており、ここでの Hauptform とは Urbild と同義語と理解することができるが、これは不変であると同時に変幻自在であるというゲーテの原型概念に対応している。そして興味深いのは下線部②に明らかなように、この原型論がゲーテの場合と同様に有機体相互のいわゆる比較考察の基礎に置かれている点である。そして下線部③にあるように、ヘルダーにおいてもいわゆる予算一定の法則が有機体理解にとって重要な意味を持っていると見ることができる。『イデー』第2巻の後半では、この点について

<sup>24</sup> H 3, S.66.

て次のような表現が見られる。「この地上の生きた被造物全体をとおしてひとつの有機組織のアナロゴン（類似体）が支配しているというのは、解剖学的にも生理学的にも真実である。」<sup>25</sup>この問題は『イデー』第3巻と第4巻前半で詳しく論じられることになるが、自然全体をひとつの原理にしたがって統一的に把握する方向は、動物の本能と人間の理性の間の断絶を否定して自然を連続体として捉える見方に接続するものである。

ここで確認しておきたいのが、1784年3月27日付ゲーテのヘルダー宛書簡である。そこでゲーテは人間の顎間骨を発見した喜びを伝え、この発見がヘルダーの「仕事全体」にとっても重要な意味を持つだろうと述べている。<sup>26</sup>サルとヒトとの間の相違を否定するこの発見は、当時カンパーら比較解剖学者からは認められなかったが、ゲーテはヘルダーに良き理解者を見出したはずである。同時にこの発見が、『イデー』執筆によって大きな刺激になったことは間違いないだろう。

さてここで重要なことは、ヘルダーが有機組織の基本原則として有機組織力（organische Kräfte）に注目している点である。この有機組織力とは「形態を得ようと努め、自己を形成する」<sup>27</sup>原動力と表現されているが、力の概念はヘルダーの歴史哲学では人類史展開の中心に位置づけられて重要な意味を持っている。ゲーテも、「すべての物質は自己を形成しようとする抗しがたい衝動を持っている」<sup>28</sup>と述べ、生物を形と力の二方向において追求したのであり、力の概念はゲーテ形態学においても重要な意味を担っている。ヘルダーとゲーテはともに自然の形態を完成し

---

<sup>25</sup> H 3, S. 60. ゲーテは『箴言と省察』のなかで次のように述べている。「個々の存在物はすべての存在物のアナロゴン（類似体）である。それゆえ、私たちに存在はつねに分離されたものであると同時に結合されたものとして現れる。」HA 12, S. 368.

<sup>26</sup> Goethes Briefe. Bd. 1, S. 435ff.

<sup>27</sup> H 3, S. 96.

<sup>28</sup> Goethe. Die Schriften zur Naturwissenschaft. Leopoldina-Ausgabe. I. Abteilung. Bd. 2. Schriften zur Geologie und Mineralogie 1812-1832. Weimar 1949, S. 112.

た静的なものとは見ておらず、有機的自然のうちに形態形成の源となる動的な力を認めているのである。ヘルダーはすでに初期から自らの歴史哲学を「世界形成の普遍史」(Universalgeschichte der Bildung der Welt)<sup>29</sup>と呼んでおり、形成(Bildung)概念を歴史哲学構想の中心に据えている。この形成概念は、他と繋がりを持ちながら絶え間なく変化しつづける生きた有機体の動的な営みを意味しており、力の概念と密接に結びつくものに他ならない。この形成概念を媒介にしてゲーテの自然研究とヘルダーの歴史哲学は結びついていると言える。

力概念と形成概念を中心とした世界形成の理論は、ゲーテの原型論とメタモルフォーゼ論に対応して、ヘルダー歴史哲学の柱となっているのだが、『イデー』では、この理論がゲーテ形態学の範囲を超えてより広い歴史哲学的な意味を与えられることになる。『イデー』のなかで人類史の歩みを規定するものとして重要な意味持っているもののひとつに、神の似姿(Imago Dei)の思想があり、これをヘルダー固有の原型論として見ることができる。ヘルダーは人間を自然の連鎖の一部として捉え、人間の歴史は自然史に属しているとする。そして人類史を自然史に接続するものとして有機体論を中心に考察し、有機体の形成と変形のプロセスを人類史の原動力のひとつとして捉えている。しかしその一方でヘルダーは人間に自然の全被造物から独立した特別な精神的意味を認めている。自然史における人間の誕生を第一の生成(die erste Genese)とすると、これは第二の生成(die zweite Genese)と呼ばれ、人間の文化がその具体的現れとされる。ヘルダーは人間のうちに第一の生成と第二の生成という二重性を認め、人間は自然界に結び付けられていると同時により高次の精神界へ進む可能性を持っていると位置づける。そして人間が他の被造物とは異質の文化的・精神的存在者であることを強調する際の論拠と

---

<sup>29</sup> Johann Gottfried Herder. Sämtliche Werke. Hrsg. von Bernhard Suphan. Bd. IV. Berlin 1878, S. 353.

なるものが、神の似姿の思想である。人間の第二の生成としての人類史の段階では、その基点において神の像（Bild Gottes）が刻印されているのであり、神の像はいわゆる原型として、自然史とは異なる人類史の独自性を保証し、人類史の展開のもうひとつの原動力とされている。

そしてこの原型が人類史のさまざまな時代、そして地球のさまざまな風土において多様な文化形態として現れるとされており、このいわゆる歴史的なメタモルフォーゼの考察がヘルダーの歴史哲学の中心に位置している。ヘルダーは言語・文学・芸術・ポエジーの普遍的特性を時代・風土・民族の多様性のなかで捉えようとする。ゲーテが自然の事物の研究に自らの考察を限定したのにたいして、ヘルダーは人類史という広大な領域に考察の対象を求めたのである。

ここにゲーテとヘルダーの研究が結びつきながらも離れていく点を確認することができる。『イタリア紀行』でゲーテは次のように述べている。「われわれ二人は物の考え方において、たと一つではないにしてもこの上なく接近しており、主要な眼目では最も近づいている。…もちろんあなたの言うように、私の考えはあまりに眼前の事物に執着していた。」<sup>30</sup>「眼前の事物に執着していた」というゲーテ自身の言葉からも明らかなように、ゲーテにおいて自然研究の導きの糸となっている原型論とメタモルフォーゼ論は、徹頭徹尾眼に見える自然という具体的な形態を離れることはなかった。彼にとっては自然の生きた形態こそが研究の始点であると同時に終着点でもあった。この意味でゲーテ形態学では、形態という空間性のうちに時間的変化が見て取られているのであり、空間が時間的変化を内包していると言うことができるだろう。

ヘルダーは形態の重要性を再三強調しながらも、歴史哲学構想では時間的変化に特別な意味を認めている。これは未来におけるフマニテート完成の思想に確認することができる。ゲーテとは違ってヘルダーは、具

---

<sup>30</sup> HA 11, S. 322.

体的形態を超えて時間的、歴史的な変化の層へ目を向けていたと言えるだろう。この両者の相違についてはゲーテの次の言葉が示唆的である。

「ヘルダーの（『イデー』）第三部を私は非常に楽しみにしている。…人類の状態はいつか将来には現在よりよくなるという美しい空想的な願望が、この書物では立派に書かれていることだろう。私自身もあえて言うが、フマニテートが最後の勝利を占めるというのは真実だと思う。ただ私は同時に世界が一個の大きな病院となり、各人はお互いに他人の人道上の看護人になってしまうのではないかと怖れているのだ。」<sup>31</sup>

ヘルダーは歴史の無際限の広がりの中なかで、フマニテート思想を導きの糸とした。1790年代に成立した『フマニテート促進のための書簡』はその代表的な例である。このフマニテート思想をめぐってヘルダーとゲーテは相互に立場の違いを認識し始める。ヘルダーは徐々にゲーテの芸術観に、自らのフマニテート思想とは相容れないものを見いだすようになる。80年代後半に両者の相互理解が最高の状態に達したときに、そこにはすでにこのような齟齬が見え始めていた。

#### 4.

1794年以降ゲーテとシラーが緊密な協力体勢をとるようになってから、ヘルダーとゲーテの関係は疎遠になっていく。その理由として、シラーが信奉しゲーテも積極的に評価したカント哲学にたいしてヘルダーが厳しい批判的態度をとったこと、古典主義における芸術の自立性の理解が、芸術を歴史の多様な連関のうちに捉えるヘルダーの立場と対立するものであったことを挙げるができるだろう。1790年代後半以降へ

---

<sup>31</sup> Ebd., S.332.

ルダーはヴァイマルにおいて孤立感を深めていくことになる。

ゲーテは『詩と真実』のなかで、ヘルダーが愛すべき人好きのする一方で生来反発的な感情の動きが激しいことを述べている。1790年代以降のゲーテとの関係がこの反発的な感情に支配されていたとすれば、1780年代の両者の間には求心力が優勢であったとも言えよう。しかしこの時期の両者の交流を促したものとして、個人的な状況を超えた時代のさまざまな流れが存在していたことも忘れてはならない。例えば、ハラーやカスパー・フリードリヒ・ヴォルフ、ブルーメンバッハに代表される前成説・後成説論争、レッシングのスピノザ理解をめぐるのヤコービとメンデルスゾーンの対立に端を発した汎神論論争は、ゲーテとヘルダーの交流にとって重要な意味を持っている。また、カンパー、ツィンマーマンの比較解剖学、ラヴァーターの観相学、リンネの植物学、ビュフォンの博物誌も両者が等しく関心を持っていた領域である。1780年代のゲーテとヘルダーの思想交流の特徴を今後いっそう詳しく考察するためには、両者の思想の類似点をただちに影響関係として見るのではなく、両者の間に介在する多くの思想家の説を確認しながら、この時期の思想状況のなかに形態学と歴史哲学を位置づけていく必要があるだろう。